

ヤスクニ・レポ 186

戦後史を総括しよう

—安倍首相の70年談話とは何か

代表 西川重則

1

昨日(2015・3・16、月)の参院予算委員会で、安倍首相が戦後の首相として質問された時、首相は、何と平和のために努力してきたと平然と言いつつ驚いた私である。具体的には平和憲法である日本国憲法を守ってきたという意味のように思われた。

国会の衆院・参院の予算委員会は、国会議員にとって、その委員会に選ばれることは誇りに値すると思われている。それだけに、マスコミも予算委員会はNHKもテレビ報道に値するとして全国報道していることは知られている。

しかし、安倍首相が日本国憲法を守り、憲法政治に努力しているとは思えないし、自民党の党員として、自民党の結成の意味を知っているはずの首相が上のような答弁をして恥じないのは、私にとって文字通り大きな驚きであった。改めて自民党の結成の歴史、目的について報告してみよう。

自民党が結成されたのは、1955年11月15日であり、敗戦後10年の戦後55年体制の始まりの年であった。「自由民主党の基本方針」の一部を紹介し、参考に供したい。

「わが党は……国民大衆と相携え、第一、国民道義の確立と教育の改革、第二、政官界の刷新、第三、経済自立の達成、第四、福祉社会の建設、第五、平和外交の積極的展開、第六、現行憲法の自主的改正をはじめとする独立体制の整備を強力に実行し、もって、国民の負託に応えんとするものである」。

以上の文言で分かるように、自民党結成に際して、基本方針の第六に、「現行憲法の自主的改正」は日本の「独立体制の整備を強力に実行し、「国民の負託に応え」たいという決意によるものであった。

上の引用は、西川重則著で大著であるが報告に値する『靖国法案の展望』、500—502頁に報告

されている。

なぜ報告に値するのかと言えば、先ほど挙げた予算委員会での答弁が不正確かつ間違いであることを知るために貴重な自民党結成の日の「自民党の基本方針」に明記されている「現行憲法の自主的改正」という憲法改正、憲法改悪の戦後史の総括に不可欠の報告であるからである。

私は歴史的認識の要件である年表による歴史の事実を確認することの重要性を痛感している。「現行憲法の自主的改正」を要望している自民党の結成であるが、その後の1969年5月3日(現行憲法記念日)に、「自主憲法制定国民会議」が結成されている。会長は岸信介氏であり、岸信介氏が第一次岸内閣成立(1957・2・25—、第二次岸内閣は1960・7・15総辞職)したが、岸信介氏は首相になる前の1954年3月12日、「自由党憲法調査会」を発足させ、自ら会長となり、「日本国憲法改正案要綱」を発表している(同年11月5日)。安倍首相は現在60才(1954・9・21生まれ)だが、岸信介氏の改憲構想にも大きな影響を受けており、戦後史最大の右翼集団と思われる「日本会議」の安倍首相は長年の『政策的ブレイン』でもある。「朝日新聞」(2014・8・1)に、日本会議の「三ヵ年構想」が報告されているが、「全国に憲法改正の推進本部を設置」し、「地方議会での意見書運動」が展開されており、上の「朝日新聞」に、大きな見出しで「地方から改憲の声 演出」、「日本会議が案文 議員ら呼応」、「自民、国会発議めざしムード作り」、「『真正保守』掲げる・安倍首相と重なる思想」、「護憲派、危機感強める」といった見出しで浮きぼりにされた今日の緊急かつ重大な憲法改悪、戦争問題について、私たちに絶対に見逃さない無関心ではおれない戦後70年をいかに考え、どう対峙すべきかを以下に述べ、共なる信仰の戦い、具体的な憲法学習、

運動の展開を強調したい。

戦後70年の課題を考える場合、安倍首相が予定しているいわゆる70年談話の内容について、主権者・有権者として絶対に無視できない首相の70年談話であることの認識、信仰的・良心的な対峙は重要である。

私は、安倍首相の70年談話は安倍首相の日本国憲法に基づく政治、すなわち私が何度も強調・批判している通り、安倍首相には私が望んでいる70年談話を発表する資格はない。したがって70年談話の内容について納得できることはあり得ない。安倍内閣の閣僚も納得できる人物はいない。

2015年2月19日に、「戦後70年談話有識者会議 西室氏、座長に内定 代理に北岡氏」の見出しが見られたが、有識者会議そのものの不安定さが私には案じられる(上記の日の「朝日新聞」参照)。たとえば、評価され期待されている北岡氏(北岡伸一国際大学長)にしても問題がないとは思われない。

北岡伸一氏は「朝日新聞」(2010・1・29)によって非常に有意義な「日中歴史共同研究初の報告へ」の見出しの下、中国の歩兵氏(中国社会科学院近代史研究所長)と共に貴重な歴史研究にかかわる最も重要な日中歴史共同研究について両者が「重要な議論をいくつか挙げれば、日中戦争の性格が『中

国に対する侵略戦争だった』という点で一致し……」たと発言している。

以上の共同研究の発表がいかにか歴史的・今日的に不可欠・不可避な報告であるかということである。つまり七〇年談話の閣議決定・国会提出の資格もない。

2

ところが、首相の70年談話の有識者会議の座長代理に選ばれた北岡氏が安倍首相の70年談話の作成過程にあつて、「侵略戦争」だったことを学者として確信をもって断言することができない現状がマスコミ発言で案じられる状況である。

以下の村山談話(全文)、小泉談話(全文)を始め、次のような大きな見出しが「朝日新聞」(2015・3・4)に見られるが、極めて重要な見出しであり、解説である。「戦後50年、草稿段階から『侵略』表現、閣議で読み上げ異論出ず」と。以上は「村山談話おわび明記」の執筆者、戦後50年の談話を発表する村山富市首相=1995年8月15日に写真入で、第四頁に全文貴重な文言が記されている。

安倍首相の70年談話を許さない立場から、戦後史の総括にかかわる報告を終わります(2015・3・17)。

2015年2月20日例会奨励 ルカの福音書9章28～36節「イエス様の最期の話し合い」 山本進牧師(日本同盟基督教団 馬込沢キリスト教会教師)

祈りのためにイエス様はペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて山に登られました。その祈祷課題は、十字架で終わるご最期のことです(31)。イエス様が祈っておられると、御顔の様子が変わり、御衣は白く光り輝きだしました。その神の栄光のうちに律法の代表モーセと預言者の代表エリヤが現れました。その三人の話し合いは、人々の救いの方法が変わる話し合いでした。人の贖いのために動物が犠牲になる救いから、イエス様を信じる信仰で救われるのです。

31節の「ご最期」と訳されているギリシャ語のエクソドス(旧約聖書の出エジプト記がエクソドスと呼ばれています)は出て行く、離れるとか門出、

出発という意味です。出エジプトはエジプトの奴隷生活からのイスラエルの救いです。聖書の救い、イエス様の救いは、今までの生き方の終わり新しい出発の両方があるのです。

日本国憲法の生き方が大きく揺さぶられています。憲法改正が確定的で、もうほとんどだめかと思われるときでも、私たちは、エクソドス、最期であると思われるところからの復活があることを信じて、モーセのように準備に怠らず、勝利を目指していきたいと思います。私たちの戦いはたいへん厳しい。しかし、モーセもエリヤもイエス様も体験された同じエクソドスの信仰を持ち続けたいのです。